

新発見の「長恨歌伝」について

陳, 翀
広島大学 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1498244>

出版情報 : 中国文学論集. 43, pp.105-114, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

新発見の「長恨歌伝」について

陳
獅

本稿は、明末清初の文人呉景旭が撰した『歴代詩話』に見える「長恨歌伝」記事を手掛かりとし、まず、明清時代以前に、陳鴻「長恨歌伝」と全く異なる、もう一篇の「長恨歌伝」（以下、新伝と略称）が存在していたことを指摘し、また、現存する百二十巻本『說郛』所収の陳鴻「長恨歌伝」の末尾に、その全文が附記として抄録されていることを明らかにする。さらに、この新伝の成立時期に関しても、些か考察を加える。

一

「長恨歌伝」と言えば、恐らく殆どの学者は、通行本である白居易詩文集に収録される陳鴻「長恨歌伝」^①しか思い出さないであろう。この陳鴻伝が、長らく白居易「長恨歌」の序文として読まれてきたのも事実である。

さて、周知の如く、現存する陳鴻伝は、「A」『白氏文集』所収陳鴻「長恨歌伝」、^②「B」『文苑英華』卷七九四所収「長恨歌伝」附「麗情集及京本大曲本」所収「長恨歌伝」、^③「C」『太平広記』卷四八六所収「長恨伝」、以上三系統のテキストが存在している。しかし、この三系統のテキストは、具体的な表現こそ多くの異同が存在するものの、物語の梗概自体に大きな差異は存在しない。現在のところ、一般にその内の二本は、他の一本に基づいて生じた異本であると考えられている。それゆえ、従来の長恨歌研究においては、『白氏文集』所収本『長恨歌伝』と白居易「長恨歌」との間に如何なる関連があったかということに、研究の焦点が合わせられてきた。

新発見の「長恨歌伝」について

しかしながら、殆ど知られていないものの、明清時代以前に、実は上記の三本の「長恨歌伝」と全く異なる、もう一篇の「伝」が存在していた。この伝は、筆者が明末清初の『歴代詩話』に見える「長恨歌」記事を整理するなかで発見されたものである。この新伝の発見によって、明清以前の文人たちは、必ずしも陳鴻伝と白歌とをセットで読んでいたとは限らないという新事実が浮き彫りになる。ちなみに、『歴代詩話』巻五十八「玉奴」に記された該当箇所の記事は、以下の通りである。³⁾

東坡詩、「玉奴絃索花奴手」。吳旦生曰、玉奴謂楊貴妃、花奴謂汝陽王璣也。按、『南史』、「東昏侯妃潘玉奴」。又「長恨歌傳」、「楊太真生而有玉環在其左臂。環上有墳起太真二小字、故小名玉環。」『西粵志』云、「玉環、容州人、長史楊玄琰以千金得之楊康家。」則坡詩似誤。然觀鄭嵎「津陽門詩」「玉奴琵琶龍香撥」注云、「玉奴乃太真小字也。」『復齋漫錄』云、「東坡梅花詩、『月地雲階慢一樽、玉奴終不負東昏。』『南史』、「東昏侯潘玉兒有國色。」牛僧孺「周秦行記」、「潘妃辭曰、東昏以玉兒身死國除、不忍負他。注云、玉兒、妃小字也。」坡以兒為奴、誤也。據此則玉奴之誤。余竊謂、「在潘不在楊矣。」（東坡詩に、「玉奴は絃索花奴は手」と。吳旦生曰く、玉奴は楊貴妃を謂ひ、花奴は汝陽王璣を謂ふと。按ずるに、『南史』に「東昏侯妃潘玉奴」と。又「長恨歌伝」に、「楊太真 生れながらに玉環有りて其の左臂に在り。環上に墳起して太真の二小字有り、故に玉環を小名とす」と。『西粵志』に云ふ、「玉環、容州の人、長史楊玄琰 千金を以て之を楊康の家を得」と。則ち坡詩は誤るに似たり。然るに鄭嵎「津陽門詩」「玉奴の琵琶 竜香の撥」の注を觀るに云ふ、「玉奴乃ち太真の小字なり」と。『復齋漫錄』に云ふ、「東坡の梅花詩に、『月地雲階一樽を慢し、玉奴終に東昏に負かず』と。『南史』に、「東昏侯潘玉兒國色有り」と。牛僧孺「周秦行記」に、「潘妃辭して曰く、『東昏は玉兒を以て身は死に國は除かるれば、他に負むくに忍びず』と。注して云ふ、『玉兒は、妃の小字なり』と。坡兒を以て奴と為すは、誤れるなり。此に拠れば則ち玉奴の誤りなり。余竊かに謂ふ、「潘に在りて楊に在らざるなり」と。）

吳景旭の『歴代詩話』は、数多くの明清詩話の中において、決して広く知られているとは言い難い。理由としては、以下の二点が考えられる。まず一つは、著者である吳景旭は、明が滅亡の後に、長らく帰安（今浙江省呉興県）に身を潜め、終身に亘って清に仕えることがなかった点である。そしてもう一つは、『歴代詩話』の学術価値こそ、早

くに清代の館臣に認められて「四庫全書」に収録されたものの、その巻帙が浩蕩のため、ついに清代において上梓されなかつた点である。ちなみに、「民国藏書第一人」と美称された嘉業堂主人の劉承幹（一八八一—一九六三）は、のちにこの『歴代詩話』を刊刻する際に跋文を附して、その史料的な価値を次のように高く評価している。⁽⁴⁾

歴代詩話八十卷、吳景旭旦生撰。旦生一號仁山、歸安人、明諸生、耆德篤學。由前邱移城內之蓮花莊、築堂名南山。卽趙子昂故宅。旦生於此、嘯詠終日、有南山自訂詩。此書分爲十集、以十干爲目。甲集六卷、皆論三百篇。乙集六卷、皆論楚詞。丙集九卷、皆論賦。丁集六卷、皆論古樂府。戊集六卷、皆論漢魏六朝詩。己集十二卷、前九卷論杜詩、後三卷爲杜陵譜系。庚集九卷、皆論唐詩。辛集七卷、皆論宋詩。壬集十卷、前三卷論金詩、後七卷論元詩。癸集九卷、皆論明詩。其體例仿陳耀文學林就正、每條各立標題、先引舊說於前、後雜采諸書以相考證。或辨其是、或參其異同。或引伸其未竟、或補綴其所遺。皆下一格書之。舊說所無、而景旭自立論者、則維列本詩於前、而以己意發揮之。雖皆采自詩話說部、不盡根柢於原書。而取材繁富、能以衆說互相鉤質、以參考其得失。已開乾嘉諸儒之風氣。名爲詩話、意不專於主說詩、提要以漁隱叢話擬之、覺其氣象尤爲宏遠。祇因卷帙重大、二百餘年竟無刻本。輾轉傳鈔、不無譌誤。今爲刊行、庶不泯作者之辛苦、而貽後學以資糧矣。歲在甲寅六月、吳興劉承幹跋。〔歴代詩話〕八十卷、吳景旭旦生の撰なり。旦生、一に仁山と号し、歸安の人、明の諸生、耆德篤學なり。前邱より城内の蓮花莊に移り、堂を築きて南山と名づける。即ち趙子昂の故宅なり。旦生は此に於いて、嘯詠すること終日、『南山自訂詩』有り。此の書分かちて十集爲り、十干を以て目と爲す。甲集は六卷、皆な三百篇を論ず。乙集は六卷、皆な楚詞を論ず。丙集は九卷、皆な賦を論ず。丁集は六卷、皆な古樂府を論ず。戊集は六卷、皆な漢魏六朝詩を論ず。己集は十二卷、前九卷は杜詩を論じ、後三卷は杜陵譜系と爲す。庚集は九卷、皆な唐詩を論ず。辛集は七卷、皆宋詩を論ず。壬集は十卷、前三卷は金詩を論じ、後七卷は元詩を論ず。癸集は九卷、皆明詩を論ず。其の体例は陳耀文の『学林就正』に倣ひ、毎条は各おの標題を立て、先に旧説を前に引き、後に諸書より雜采して以て相ひ考證す。或は其の是を弁じ、或は其の異同を參す。或は其の未竟を引伸し、或は其の所遺を補綴す。皆な一格を下げて之を書す。旧説の無き所、而して景旭自ら論を立てるは、則ち維だ本詩を前に列し、己の意を以て之を發揮す。皆な詩話說部より采ると雖も、尽く

は原書に根柢せず。而して取材豊富にして、能く衆説を以て互相に鉤質し、以て其の得失を参考す。已に乾嘉諸儒の風氣を開けり。名は詩話と為すとも、意は主に詩を説くを専らにせず。『提要』は『漁隱叢話』を以て之に擬するも、其の氣象は尤も宏遠爲ることを覚ゆ。祇に巻帙の重大なるに因りて、二百余年竟に刻本無し。輒転として伝鈔され、譌誤無からず。今刊行を爲すは、作者の辛苦を浪ぼさず、而して後学に貽すに資糧を以てせんことを庶へばなり。歳は甲寅六月に在り、吳興劉承幹跋す。

また、かの高名な周作人（一八八五—一九六七）も、「吳景旭、字且生、著有『歷代詩話』八十卷、刻入嘉業堂的『吳興先哲遺書』中、是我所喜欢的一種書（吳景旭、字は且生、『歷代詩話』を撰し、嘉業堂の『吳興先哲遺書』に収録される。私が好きな本の一冊である）」と、この本の価値を高く評価している。⁵⁾以上よりすれば、『歷代詩話』の学術的な価値については、ある程度認めてもよいであろう。

二

『歷代詩話』に対する評価を踏まえた上で、改めて前挙した吳景旭記事の次の一文に注目したい。

又「長恨歌傳」、「楊太真生而有玉環在其左臂。環上有墳起太真二小字、故小名玉環。」（又「長恨歌伝」に、「楊太真 生れながらに玉環有りて其の左臂に在り。環上に墳起して太真の二小字有り、故に玉環を小名とす」と。）右記の一文は、現存する陳鴻伝による引文ではないことがまず確認できる。よって、かつては、陳鴻伝と異なる、もう一篇の「長恨歌伝」が存在していたことが窺える。

一方、『歷代詩話』に記される吳景旭の考証部分に、陳鴻「長恨歌伝」から引用した部分も存在する。卷五十二「幸驪山」に、「長恨傳云、天寶十年避暑驪山宮」という用例がみえる。⁶⁾篇名からみると、この一文は、『太平広記』卷四八六所収陳鴻「長恨伝」の「天寶十年、侍輦避暑驪山宮」の一文の省略であることがわかる。よって、吳景旭の考証文においては、「長恨歌伝」と陳鴻撰「長恨伝」というように、両文章の篇名の表示を、意識的に使い分けていた可能性が極めて高いと思われる。

しかしながら、「歴代詩話」に言及する新伝は、ごく僅かな一文しか記されていない。果たしてその全文が、今日まだ存在しているのか、疑問が残る。ところが、手元に整理した長恨歌資料を繙いてみると、幸運にも、その本文が百二十卷本『説郛』の卷百十一下「長恨歌伝」の末尾に附記されていたことがわかった。その本文を翻字して標点を加え、以下に記す。

楊太真生而有玉環在其左臂。環上有墳起太真二小字、故小名玉環。馬嵬變後、明皇朝夕思惟、形神憔悴。有道士以少君術求見、上極其寵待、冀得復見、即死不憾。道士出袖中筆墨、索細黃絹、誦咒呵筆、畫一女人像、若天師所畫將符、僅類人形而已。使上齋戒懷之、凝神定意、想其平日、三日夜不懈。道士曰、「得之矣。」上出像觀之、乃真貴妃面貌也。上喜甚、道士笑曰、「未也。」請具五色帳、結壇壁而供之。索十五六聰慧端正之女二十四人、齊聲歌子建步虛詞。道士復焚符誦咒、吸煙呵像上。次命諸女一一如方呵之。至定昏時、請上自秉燭入帳中。先是、道士以五色石示上、謂之【※缺字有り】。以少許研極細、和以諸藥、令作燭、外畫五色花、謂之還形燭。上既入、道士命侍者出、反閉金扉、以葳蕤鎖鎖之。于是太真在帳中見上、泣曰、「以天下之主、不能庇一弱女、何面顏復見妾乎。沈香亭下、月中之誓、何在也。」上亦淚下言、「馬嵬之變、出于不意。」其言甚多、太真意少釋、與上曲盡綢繆、勝于平日。脱臂上玉環、内上臂。天未明、道士啟扉曰、「宜別矣。」上出帳回視、不復更見。惟玉環宛然在臂耳。道士具言、「太真所以尸解、今見為某洞仙。甚悉多所秘。」道士姓王、名舟、不知何許人。要其術過于李夫人。是邪非邪、遠矣。此說又與長恨歌異。存之備考。玄虚子志。（楊太真生れながらに玉環有りて其の左臂に在り。環上に墳起して太真の二小字有り、故に玉環を小名とす。馬嵬變の後、明皇朝夕思惟し、形神憔悴す。道士有りて少君の術を以て見えんことを求め、上其の寵を極めて待し、冀ふに復た見ることを得ば、即ち死すとも憾まざると。道士袖中の筆墨を出し、細黄絹を索め、咒を誦し筆を呵し、一女人像を画けば、天師の画く所の将符の若く、僅かに人形に類するのみ。上をして齋戒して之を懐き、神を凝らし意を定め、其の平日を想ひ、三日夜懈らざらしむ。道士曰く、「之を得るや」と。上像を出して之を觀れば、乃ち真に貴妃の面貌なり。上喜ぶこと甚だしきに、道士笑ひて曰く、「未だし」と。五色の帳を具へ、壇を壁に結びて之に供ふるを請ふ。十五六の聰慧端正の女二十四人を索め、齊声して子建の步虚詞を歌はしむ。道士復た符を焚き

て咒を誦し、煙を吸ひて像の上に呵す。次に諸女に命じて一方の如く之を呵せしむ。定昏の時に至り、上の自ら燭を乗りて帳中に入らんことを請ふ。是より先、道士五色石を以て上に示し、謂之【※缺字有り】。少許を以て極細に研ぎ、和するに諸薬を以てし、燭を作らしめ、外に五色花を画き、之を還形燭と謂ふ。上既に入り、道士侍者に命じて出でて、金扉を反閉し、葳蕤鎖を以て之を鎖さしむ。是に于ひて太真帳中に在りて上に見え、泣きて曰く、「天下の主を以て、一弱女を庇ふ能はず。何ぞ顔を面して復た妾を見るや。沈香亭の下、月中の誓、何くにか在る」と。上も亦た涙を下して言ふ、「馬嵬の変は、不意に出づ」と。其の言甚だ多くして、太真の意少しく釈け、上と綢繆を曲尽すること、平日に勝る。臂上の玉環を脱し、上の臂に内む。天未だ明けざるに、道士扉を啓きて曰く、「宜しく別るるべし」と。上帳を出で回視するも、復た更に見ず、惟だ玉環の宛然として臂に在るのみ。道士具に言ふ、「太真の尸解せし所以は、今見はれて某洞の仙と為ればなり。甚だ悉多く秘する所なり」と。道士姓は王、名は舟、何許の人なるかを知らず。其の術を要めて李夫人に過ぎる。是非か、遠きかな。此説又た長恨歌と異なれり。之を存して考に備ふ。玄虚子志す。）

三

ところで、現存する陳鴻伝を所収する諸書籍の成立時期からみると、陳鴻伝の成立は、少なくとも宋初に遡ることが出来る。だとすれば、この無名氏が撰した伝は、果たしていつの時代に成立したものであろうか。

新伝の成立時期を探る最大の手がかりは、何よりも『説郭』という書物にあるであろう。ところが、現存する『説郭』の伝承経緯はかなり複雑である。すでに竹村則行氏によつて明らかにされたように、『説郭』そのものは元末明初の文人である陶宗儀の編纂であるものの、現存する『説郭』一百卷は、後三十卷が失われていたのを明・弘治間の文人郁文博が補訂したものであり、近人張宗祥の涵芬楼藏本に基づく校補によつて、民国十六年（一九二七）に商務印書館から刊行された。また同じく明代には、やや後の万曆間の文人である陶珽による二〇〇号が編まれたが、こちらを『重較（また重校、また重編）説郭』と呼び、同編『説郭統』四十六卷を附して刊行され、明清間を通じ

て広く通行して今日に至っている⁵⁾。ちなみに、百巻本には該当記事が存在していないこともあって、この新伝が、果たして陶宗儀による『説郛』編纂当初の章節であるかどうかについて即断できない。ただ、この新伝の存在は、陶斑が百二十巻本『説郛』を重編した万暦年間までには、間違いなく遡れるはずである。

ところで、新伝の末尾に記された「此説又與長恨歌異、存之備考、玄虚子志」との一文は、この新伝の成立時期を探る新たな手がかりとなる。この一文からみると、この「玄虚子」と自称する人も、自分が目にした「長恨歌」単行本の前に附されたこの新伝は、あまりにも「長恨歌」の展開と相違しているのです、ついにこの新伝を、通行本の陳鴻「長恨歌伝」（末尾に白居易「長恨歌」を記載）に、附記として抄録したのである。つまり、百二十巻本『説郛』の該当部分は、あるいはこの「玄虚子」により残された文献によるものであるとも推測できる。

さて、この「玄虚子」は如何なる時代の人物であろうか。同じく明代の文人徐燉が撰した『徐氏筆精』巻五「詩談・徐貞一」に、次のような興味深い記事が窺える⁶⁾。

政和徐貞一、號玄虚子、能詩。嘗過仙霞關、關吏訝其異服、執之。貞一瞪目不答。吏繫之郵亭。迨夜、給守者出、袖中出大筆、書二絶於壁云、「一劍凌空海色秋、玉皇賜宴紫虚樓。醉來跨鶴須彌頂、指點培塿見十洲」、「碧殿歌傳阿濫堆、玉笙吹徹海桃開。仰天一嘯江風發、笑接白雲歸去來」。乘夜遁去、晨起盛傳仙人至關。走看墨跡、不絶於道。（政和の徐貞一、玄虚子と号し、詩を能くす。嘗て仙霞関を過ぎるに、関吏其の異服を訝り、之を執ふ。貞一目を瞪て答へず。吏之を郵亭に繋ぐ。夜に迨び、守者を締ぎて出で、袖中より大筆を出だし、二絶を壁に書して云ふ、「一劍空を凌ぎて海色秋なり、玉皇宴を賜ふ紫虚の楼。酔ひ来たりて鶴に跨る須弥の頂、培塿を指點して十洲を見る」、「碧殿の歌は伝はる阿濫堆、玉笙吹き徹して海桃開く。天を仰ぎて一たび嘯ふけば江風発ち、笑ひて白雲に接し帰りなんいざ」と。夜に乗じて遁れ去る。晨に起きれば盛んに仙人の関に至るを伝ふ。墨跡を走看するもの、道に絶えず。）

「政和」と謂えば、北宋末の徽宗の三番目の年号であり、一一一一年から一一一八年までの時期であることがわかる。もしこの新伝の末尾に記された「玄虚子」が、この政和年間の徐貞一と同一人物であれば、この「新伝」が附された「長恨歌」単行本は、すくなくとも北宋末にすでに伝播されていたことがわかる。

ここで改めて「玉奴」の出典である蘇東坡「虢国夫人夜游図」詩の内容を確認してみよう。^⑩ その全文は、以下の通りである。

佳人自輕玉花驄、翩如驚燕踏飛龍。金鞭爭道寶釵落、何人先入明光宮。宮中羯鼓催花柳、玉奴絃索花奴手。坐中八姨真貴人、走馬來看不動塵。明眸皓齒誰復見、只有丹青餘淚痕。人間俯仰成今古、吳公臺下雷塘路。當時亦笑張麗華、不知門外韓擒虎。(佳人自ら輕す玉花驄、翩として驚燕の飛竜を踏むが如し。金鞭道を争ひ宝釵落つ、何人か先づ入る明光宮。宮中の羯鼓花柳を催し、玉奴は絃索花奴は手。坐中の八姨真の貴人、馬を走らし來り見て塵を動かさず。明眸皓齒誰か復た見ん、只だ有丹青に涙痕を余すあり。人間俯仰今古と成る、吳公台下の雷塘の路。当時亦た笑ふ 張麗華、知らず 門外の韓擒虎。)

右記の蘇東坡詩は、同じく宋代の文人洪邁に最も注釈していくい一首として挙げられるほど理解し難いものである。^⑪ しかしこれは、蘇東坡詩が元々題画詩であることを考慮していいないのである。張萱(七一三〜七五五)が描いた「虢国夫人夜游図」の原本は失われたものの、現在中国の遼寧省博物館に宋徽宗趙佶の摹本が残されている。「虢国夫人夜游図」は、玄宗が楊氏三姉妹と出遊したことを画いた絵である。^⑫ 虢国夫人とは、楊貴妃の姉で裴氏の妻である。また、蘇東坡詩中の「八姨」は秦国夫人のことを指す。よって、蘇東坡詩の「玉奴」は、間違いなく楊貴妃のことである。

蘇東坡自身がこの新伝を踏まえて右記の「虢国夫人夜游図」詩を書いたかどうか不明である。しかし、新伝によって宋版系統本「長恨歌」の本文の文字に影響が及んだ可能性が存在する。すでに呉景旭が同じ「玉奴」の記事に示唆しているように、「中有一人字太真」の「太真」とは、恐らくこの新伝の影響をうけて生まれたものであろう。^⑬ ちなみに、「中有一人字太真」の「字太真」は、旧鈔本系統本は「名玉妃」に作る。^⑭ 宋刊本が「玉妃」を「太真」に改めたのは、或いはこの伝の影響を受けたのであろう。いずれにしても、本伝は北宋時代に、長恨歌物語の単行本の一本として、歌と共に伝承されていたことが、推察できるのである。

しかしながら、今回発見した新伝にめぐる謎は、未だ多く残されている。すでに「玄虚子」により指摘されているように、この伝の内容は、長恨歌の物語の展開とかなり相違している。それにも関わらず、なぜ旧時の文人が、

この伝を「長恨歌」と一緒に読んだのか。新伝をめぐる更なる詳細な史料が欠如しているので、それ以上の考察はもはや困難である。但し、一つの可能性として、この新伝も、陳鴻伝と同じように、唐宋末初における李楊故事を演繹する大曲（歌舞劇）の過程で、生まれたものであるとも考えられる。^⑤だとすれば、伝の内容は、必ずしも歌の内容に拘る必要がないのである。

いづれにしても、陳鴻伝は、明清以前の時代に、「長恨歌」の伝として唯一のものではないことが、ほぼ断定できる。この点からみても、今回におけるこの新伝の発見は、今後の長恨歌研究を見直す際に、重要な意義を有するに違いない。

注

- (1) 日中における長恨歌研究については、周相録「中国における『長恨歌』研究」と新聞一美「わが国における『長恨歌』の受容について」（両文共に『白居易研究年報』第十号所収、勉誠出版、二〇一〇年）とを参照されたい。
- (2) これについて、竹村則行『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年）第一章『長恨歌』から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷』及び澤崎久和『白居易詩研究』（研文出版、二〇一三年）第一部「Ⅲ『長恨歌』と『長恨歌伝』を参照。
- (3) 『詩話叢編第一集 歴代詩話下』（世界書局、一九六一年）巻五十八を参照。
- (4) 前掲注（3）を参照。
- (5) 周作人「南堂詩抄」（『秉燭後談』所収、河北教育出版社、二〇〇二年）を参照。
- (6) 『詩話叢編第一集 歴代詩話』（世界書局、一九六一年）巻五十二を参照。
- (7) 『說郭三種』（上海古籍出版社、一九八八年）及び文淵閣影印四庫全書所収本を参照。なお、「缺」字部分の表記は、四庫全書本に従う。
- (8) 竹村則行『楊貴妃文学研究史』「十『楊太真外伝』の成書に関する考察——原本『楊貴妃外伝』から通行本『楊太真

新発見の「長恨歌伝」について

外伝」へ——」を参照。

- (9) 文淵閣影印四庫全書所収『徐氏筆精』を参照。但し、原文は、「玄虚子」を、康熙帝（玄燁）の諱を避けるため「元虚子」に作る。ちなみに、同じ四庫全書本『全閩詩話』巻六「徐貞一」にみえる該当記事は「玄虚子」に作る。
- (10) 『蘇軾詩集合注』巻二十七（上海古籍出版社、二〇〇一年）を参照。
- (11) 『容齋隨筆』（中華書局、二〇一三年）巻十五「注書難」を参照。
- (12) 現存する「虢国夫人夜游図」に関する紹介は、矢田尚子「唐代における男装の流行と『虢国夫人游春図』」（愛知大 学語学教育研究室紀要『言語と文学』第二〇号、二〇〇九年）を参照。
- (13) 原文は以下の通りである。「余觀詩中稱謂、有不可泥者。樂天長恨歌云、中有一人字玉真。荆公梅花詩云、膚雪參差是玉真。則又呼楊妃為玉真。」
- (14) 旧鈔本「長恨歌」と宋版「長恨歌」との文字異同について、神鷹徳治「紫式部が読んだ『文集』のテキスト——旧鈔本と刊本——」（『古代学研究所紀要』第五号、二〇〇七年）を参照。
- (15) 拙稿「新校『白居易傳』及『白氏文集』佚文彙考」（『文学遺産』二〇一〇年第六期）、「日藏旧抄本『長恨歌序』真偽考——兼論『長恨歌』主題及其本文傳變」（『域外漢籍研究集刊』第七輯、中華書局、二〇一一年）、「長恨歌並序」之歌辭結構及傳本考」（『域外漢籍研究集刊』第十一輯、中華書局、二〇一四年刊行予定）を参照。

附記：本稿は、文部科学省科学研究費（若手研究B「日本現存の旧鈔本『文選』に関する基礎的な研究」課題番号：24720166）による研究成果の一部である。